

幼稚園の一日

お茶の水女子大学付属幼稚園

一日の保育の流れについて

村井 ト ミ

「一日の保育の流れ」について書くようにということであるが、たとえば、入園当初のように、生活になれない子どもの管理上、大体一斉の行動をとるとか、何か行事のある日、またはお店ごっここの売り出しの日など、というように特別の状態の時は別として、ここではごく平凡な一日の流れについて記してみることにする。

私たちの「一日の保育の流れ」についての考えの基本は、今、この子どもたちが夢中になって楽しんでいる遊びや経験を、中断することなく、十分に満喫させ、しかもできるだけスムーズに、自発的に他の経験や活動にもっていくか（次の計画）——どうやってそうい

う雰囲気や環境をこしらえ、誘導していこうかという点にあると思う。

教師の計画通りに、子どもが今、何をやっていようと、遊びの絶頂になつていようとおかまいなく、中断され、呼び集められ、心は前の遊びに残しながら、興味もなく一斉に次の活動をさせられるとしたら、しかも一日中、中途半端に——一年中こうして過ぎたとしたら——子どもにとっては、何とあわれなことであらう。

教師は皆、教育の目的をもっているから、自分の計画の通りに、ことを運べば樂である。

一応落ちこぼれの子もないし、しっかりと教育していたとしたら、こんな単純なことはないかも知れない。しかし、これでは集団の中で一人ひとりの指導、煎じつめれば、個の指導という点で、全くマイナスであらう。

集団の中で、一人ひとりの子どもを、それぞれに伸していくことこそ、大切であると思う。だから、この気持ちをよく考えると、一日の保育の流れについても、きちん、きちんと時間割のように、うまく区切つてできないことになる。

そうだからと言って、教師は、もちろん無計画に子どものするま

「きょうは赤ちゃんのたんじょう日。たくさんたべてね。」



まに放任しておくわけではない。だいたいいつ頃にはこれをして、いつ頃にはこうしてという大ざっぱな計画はもっていて、前の活動から次の活動に、強制的でなく自然に移していくという苦心が必要なのである。

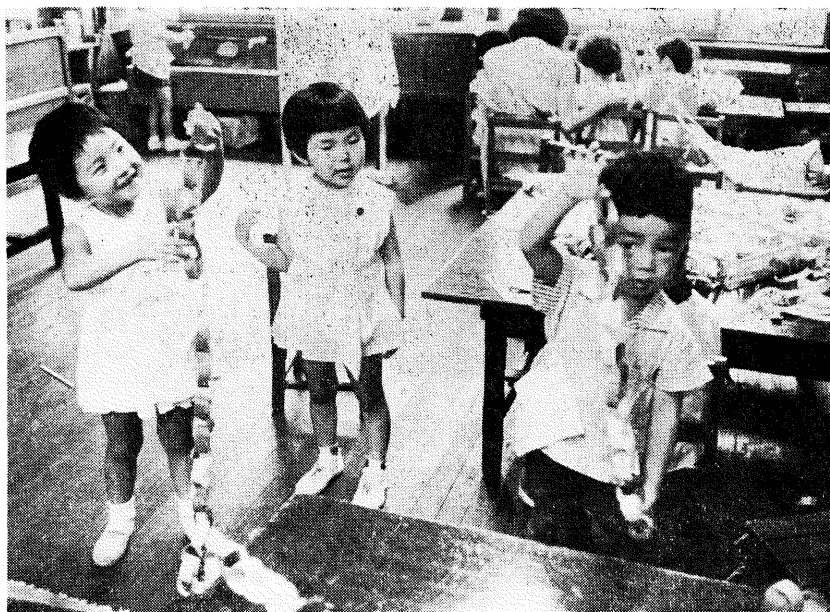
× × ×

九時前後に「おはようございます」と子どもが入ってくる。この時からすでに子どもの保育は、はじまっている。

子どもは持ち物を所定のところへ置き、手を洗い、うがいをすませると、それぞれやりたいあそびに入っていく。昨日のあそびの続きをしようと意気込んでくる子どもあれば、眼にふれたその辺の遊具の中から遊びを見出す子どももある。早速にフランコへ、砂場へと出かける子どももある。

入園当初、いろいろの遊びを充分に知って、幼稚園の生活が板についたというか、自分のものになると、子どもはほとんど選択して活動をはじめ。昨年度私の受けもった組は三才児であったが、二学期の終り頃には、それぞれあちこちにグループができて、どんどん力いっぱいあそんでいた。（まだ、はじめに遊びのきっかけをつくってあげなければならない子ども、一、二いたが）

だから、朝の中は一時間から、それ以上、まずやりたいことをさせて、十分に遊ばせた。だから子どものそろった頃に、せっかく始めた活動を中止して一堂に集会し「おはよう」と、挨拶を交すことなど、あえてしないのである。



ブランコ、スベリ台、砂場、自動車、ままごと、絵本、積木、くみ板、くみ木、ブロックなど、いろいろのものをつくったり——男の子はラケットやバットを腰にさしたり、背中につくこんだりして、忍者や鉄人になったり、それがロケットに乗っていったり、女の子はバンビごっこや白雪姫ごっこ、誕生会ごっこなどに夢中になったり、いかにもおもしろそうだった。

それぞれ、あそびを満足した頃に（だいたい一時間以上たった頃）その日の次の計画をはじめた。

たとえば何かを製作するのを例にとってみるとする。

まず教師が机の上に、材料を運んだりしていると、その辺の子ども何人かが、何するの？ と寄ってくる。そこで教師は、それに就いて話しながら、いかにも楽しそうにやりはじめたりすると、何してるのだろう？ と更にその辺の子どもが誘われて寄ってくる。そして自分も自分もと教師のまわりに集まってやり始める。べだから、取材する内容が子どもに適するもので、子どもの興味のあるものであり、色とか材料が、やりたい衝動にかられるものであることも大切な要素となる）でき上った子どもは、それを持って庭へ出かけることもある。庭で遊んでいた子どもが、それを見つけて、自分もつくろうと部屋に入ってくる子どももある。それまでの遊びを満喫していれば、だいたい次第に部屋に集まってくる。遊びが絶頂ならば、もう少しこれをしてからと思うかもしれない。だから入ってくる時間には早い遅いの差はあるが、とにかく強制的でなく自分からやる

うという気持ちで入ってくるから、つくることも楽しんですることになる。

参加してくる子どもが、早い遅いがあることが、教師には、かえって一斉に大ぜいの子どもを指導するのではなくて都合がよい。七、八人から十人位の子どもが入れかわりに交換するので、かえって、一人ひとり指導もできるし、その子がどの位、工夫したり考えたり



「ゲーキにアイスクリーム」「オートーフ」「先生たべてー」

してつくっているのか、あるいは自分から考えることができないで、人まねばかりしているか、とか、でき上りは不器用でも、あんなに、あの子なりに一生懸命努力しているのだななど、一人の子どもを、横の比較でなく、縦に通してみることもでき、いろいろと細かく知ることでもできる。

子どもから、子どもへの自然の誘導がなされない場合には、教師が、他であそんでいる子どもに、「先生たち、おへやで○○つくっているわね。あとでみんなもいらっしゃいね」と声をかけておく。すると部屋で何をしているのか知らなかった——ということもないし、適当な時にやってくる。あまり大きな時間の差はない。たまには、砂あそびなどに夢中で、遂に入ってこない子もいる。しかし、こういう時、よく考えてみると、その子が遅く登園し、まだ充分に遊んでいないのだと、うなずけることが多い。

そして教師としても、いつもいつもこの子が仕事に参加しないのならともかく、やる時には一生懸命にやるのなら、たとえば、今日は、やらなくともそんなに案ずることはないはずである。午後になって、やりたければやってもよし、明日の、ある機会にやってもよいのである。

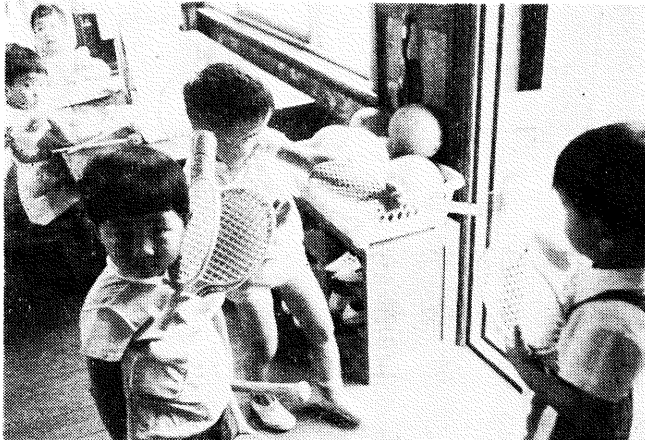
ここでは、充分に遊んでから、次の活動に入ることを書いたが、必ずこの順序によってというわけではない。日によっては朝から机の上に材料を出しておくとする。「おはよう」と入ってきて、まずつくりたいと思う子、あ、これするのだな——と知って、だけど昨日の

続きのあれでまず遊んでからと思う子もあろう。だから遊びと仕事
が並行しているのであって前者の場合も、後者の場合も、意義は同
じことであろう。

ただ、このような指導では、教師が戸外で遊んでいる子どもの管



くみ木でロボットの使うマイクつくりの夢中



「ボク忍者だ エーイ」

理を、どうするかということが問題になろう。
教師は室で指導していても、戸外のようなすが全部頭に、はいつて
いなければならない。あそここのブランコで〇〇たちがあそんでいる。
——あの砂場は〇〇たちの一グループが、おだんごをつくっていた



ロボットもエネルギーがなくなつて、
みな山のうえてパタリパタリ

から、まず大丈夫。山の上で鉄人ごっこをしている○○たちは、ときどき見にいかないと、けんかが起らないとも限らないな——というように……。

そして一番危険そうな所から、仕事のあいまをみて、さ——と見



“私おひめさま” “私は小人よ” ほんとになったつもり

てまわることが必要であろう。

室内で仕事をしている子たちは、一ときも、先生がいなくては次をどうしてつくっていくのかわからないようでは、教材が適当とは言えないし、またいちいち先生のつくり方の通りつくるといような指導では困るわけで、自分で工夫したり考えたりしながら、教師はヒントをあたえたり一しよに考えてあげたりの指導をしていけば、少しぐらい教師がいなくても、別に困らないのである。

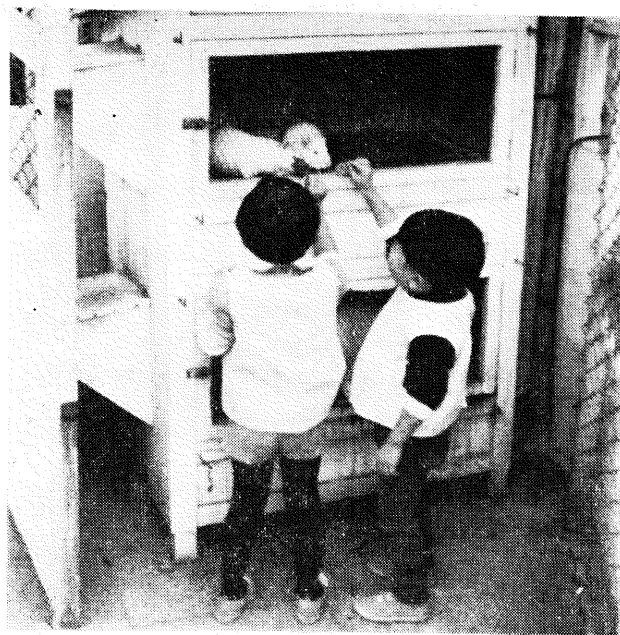
また、自分の組の子というだけでなく、この時、戸外にいる教師は幼稚園全体の子どもをみているわけであろう。幼稚園全体が、一斉に仕事、一斉に遊びというのでないから、たいていどこかの組の先生が戸外にもいる。

× × ×

このほか保育の内容にはいろいろある。テレビをみたり、お話を聞いたり、リズムであそんだり、その他いろいろあろうが、前に記した絵画製作の面などが、もっとも子どもの自発性を尊重した流し方ができ易いものであろう。

たとえばテレビなどは時間が決まっているから、テレビの方で子どもを待つてはくれない。生活している以上、当然のことであるからそれに順応しなくては時が過ぎてしまう。だから少し早目に知らせておく。リズムなども保育室でする場合、あそびの中から機会をとらえて——たとえば幼稚園ごっことか、誕生会ごっこなどから自然にピアノをひいたりして次第に人数がふえていき、もっと広い

ところということで机を隅によせて発展していったりすることもある。度々である。内容がおもしろければほとんどが参加することにもなる。特にスキップはたいいていの子が大好きなので、これらをきつかけとしても効果があるようだ。



「モルモットさん、たくさんたべなさい」

うちの幼稚園のようにたくさんさんの組があれば、自然に広いゆうぎ室を使用する日も決められている。(午後は自由だが)このように協同生活をしていく上に、人との関係、時間との関係上、現在していることを、やむなく中断しなければならぬこともでてくる。それとて、あまり興味の絶頂の時など(例えば、もう少しでトンネルが連なり、水を流そうという時など、呼び集めるのは気の毒になり、先に行っていることを告げて、「それがすんだらいらっしやいね」といって他の子どもたちと先に行く。必ずといってよい位、少したつとやってきて仲間に入る。

十一時二〇分頃になると「おかたづけ」といって、あそんだあとを、全員が協力してする。お弁当になるからだ。これ以前の片づけは、必要によって、全員でなくとも、その場の子どもだけでする時もある。また、次の活動にさしつかえなければ——そのままにしておくこともある。また、かたづけをすることによって、次の活動への移りかわりがスムーズにいかなくなる場合や、気持ちの上で空間ができってしまう時もある。だから、その場その場の状況によって片づけなかったり、または大さっぱはな片づけをしたり、または片づけなかったり、適当に判断する必要がある。

手を洗い、くばられたお盆の上にお弁当の用意をして、皆でたのしくいただく、おしゃべり専門にならない程度の楽しい会話をしながら、こぼさないように。すききらいしないでたくさんいただく。すんだ子どもから、水はみがきの液で歯をみがき、しばらくは絵本

など静かなあそびをしてから、それぞれとび出していく。晴天の日はなるべく戸外であそばせるよう誘導する。

一時になると、レコードが鳴り、幼稚園中の子どもが庭に集まり、はとぼっほの体操をする。この時こそ、一日の幼稚園の生活のくぎりなので、どんなあそびも中断して、はせ参じる。体操のあとレコードに合わせて、庭や山を行進し、最後の片づけをする。砂場や、庭にもち出した玩具のかたづけを全員で協力してする。三才でも、はじめは種類別の分類がやつの片づけも、二学期の中頃より、つみ木や、くみ板なども、きちんと箱につめるのが楽しみになったようだ。

手を洗い、コート、帽子などできるだけ一人で着る。

さようならの挨拶をすませてから、一列にならび、玄関まで教師につれられ、一人ひとり、迎えの人（主に母親）に渡すのが、一時半頃。

× × ×

以上のように、子どもの一日が終る。例は絵画製作にとつたが、その日の計画によっていろいろの内容が盛られるわけであるが、三才児なので、特に自由な遊びを主とし、他の内容は、あそびの一片として、はさんでいくという程度にした。

ここで大切なのは、自由あそびということであろう。勝手にただやらせておくというのではなく、自由あそびも大切な指導であるということ。それに没頭し、充分にあそびを楽しませるには、教師の

誘導というか、そこにかもし出す雰囲気というか、あそびを發展させる助言というか、教師もその中に入って心から遊び、活動しなければ、よい指導はできないということを、更に自覚しなければならぬと思う。

また、自由あそびをしている中に、健康の面、社会の面はもちろんのこと、自然の内容にも、たくさんふれる機会がある。

風車をまわして、こっちを向いて走るとよくまわったという経験もあったし、兎やモルモットに草をあげたり、山の途中たくさん、しも柱をふんだり、山の上の草の中に、春がきたことを知らすようにうす紫の花が咲いているのを見つけてよこんだり——書けば、きりが無い。

つまり、「一日を楽しくあそばせる」という一つの目的の中に、いろいろの内容をこめて、自覚性をもりたてながら、やっていくという方が、三才児には特に適切な言葉かもしれない。

そして、教師の中に計画はされていても、子どもの状態や、発展のしかたによって、または子どもの発案によって、変更したり、とりやめたりということは、よくあることであり、また大切なことだと思ふ。

一日の保育の流れについては、三才も四才も五才も皆同じだと思ふ。ただそこに現われてくる内容の種類や、程度や、量や、深さ、が違ふのであって、保育そのものの流れ方、精神は同じでなければならぬと思ふ。